

新たな酪肉近の策定に向けた これまでの議論の整理

平成26年10月
農林水産省生産局畜産部

目次

- | | |
|-----------------------|---|
| 1. 畜産の競争力の強化について | 1 |
| 2. 国産飼料の生産・利用の拡大について | 4 |
| 3. 加工・流通の合理化について | 6 |
| 4. 需要に応じた生産と需要の拡大について | 8 |

1. 畜産の競争力の強化に関する議論について（1）～総論～

現状の認識

- 世界の人口増と新興国の所得増加による食料需要の増加及び飼料の需給環境の変化
- 少子高齢化による畜産物の需要の減少と消費者ニーズの多様化・変化
- 日豪EPA及びTPP交渉の継続が生産者に不安を与えている状況

現状認識を踏まえた議論

（全般的な議論）

- 生産基盤を確保するための視点として、畜産の競争力を強化し、儲かる農業にするビジョンの提示が必要。
- 畜産農家だけの取組では限界があることから、生産者、流通、研究機関等を含めた取組が必要ではないか。

（酪農・肉用牛の生産基盤の重要性）

- 現時点での最大の課題は、酪農の生産基盤を強化することにより、生乳の供給安定を図ることと、肉用牛の繁殖基盤を確保すること。
- 酪農の生産基盤は、肉用牛の子牛供給元であることから重要。性判別精液、受精卵移植等の活用により、計画的に乳用後継牛の確保と肉用子牛の生産を行うことが必要ではないか。

（地域との関係）

- 農村では、畜産が地域経済の中心。畜産が地域に認められるとともに、畜産が地域を活性化することにより、畜産が地域とともに発展できるかが大切。
- 地域の畜産関係者が、地域ごとの強み弱みや課題認識を共有して解決に取り組み、持続的に発展できるモデル・型を見えるようにすることで、元気な生産者が地域を引っ張り、各地域で若い人がそれを追いかけるようになることが重要ではないか。

（競争力強化の土台となるセーフティネット）

- 生産者がやる気を持って農業に励むためにも、セーフティネット対策は重要。

1. 畜産の競争力の強化に関する議論について（2）～生産基盤と経営形態～

現状の認識

- 畜産では、これまで、戸数減を規模拡大でカバーすることで生産基盤を維持
- しかし、最近では、戸数減を規模拡大でカバーしきれず、生産基盤が弱体化

現状認識を踏まえた議論

（畜産経営の大規模化）

- これまでの大規模化により、畜産農家は着実に競争力をつけているといえるのではないか。
- 農地中間管理機構を活用しての農地の集積・規模拡大に期待。耕作放棄地の解消にもつながる。
- しかし、大規模化については以下のような課題もあり、大規模化に応じて生産性・効率性を向上させるためには、規模に応じて体制を整備し、経営を高度化させる必要がある。
①設備投資の負担、②個体管理、③深刻な人手不足、④自給飼料の不足、⑤排せつ物の処理

（経営の効率化）

- 効率化は、経営資源の向け方の問題であり、経営の効率化の方法は大規模化による増産だけではない。
- 放牧の活用等により、経費や労働負担を削減して利益を最大にする方法もあるのではないか。

（経営の多様性）

- 経費や労働負担の軽減、ワークライフバランスの考え方の変化に対応した現実的な規模の経営モデルを打ち出すことも大切ではないか。
- 副産物も、引受け側の信頼を勝ち取る努力（骨のスープとしての利用や、堆肥の稲作での活用など）によっては、奪い合いになり、商品価値が付くことを認識すべき。

（革新的技術の利用等）

- 性判別技術、受精卵移植技術は重要。
- ロボット技術やICT等の活用も有効。
- どのような経営モデルを目指し、そのためにはどのような牛が必要かといった観点から家畜改良を考えていく必要。

1. 畜産の競争力の強化に関する議論について（3）～経営力の向上と人材育成～

現状の認識

- 一部の畜産経営者は、飼養管理の専門性の向上や経営管理の高度化により、経営強化の取組を実践
- このような経営体においては、後継者も育っている

現状認識を踏まえた議論

（各種の管理技術の専門性の向上）

- 農家自身が、繁殖管理、飼料設計、飼養管理、牛の生育環境改善等について、管理技術の専門性を向上させることで、生産性を大幅に改善させることが可能。
- 獣医師等の専門家のサポートと、ITの活用による分析の強化が重要。
- TMRセンター、コントラクター、育成預託組織を利用した分業化による、専門性の向上も有効。ただし、TMRセンター等の技術力・管理力を高度化させ、外部支援組織の経営を監視しなければ、センター自体が地域の負担になる可能性もある。

（経営管理の高度化）

- 感覚での経営でなく、会計基準や指標の策定・普及による数値と決算書に基づく経営が必要。
- 農場HACCP認証は、その取組を通じて人事労務等のマネジメントの点でも活用できる。
- 経営が高度化すれば、所有と利用の分離などにより、プロジェクトローン等のファイナンスの工夫をすることで、投資負担を軽減することも可能になるのではないか。

（人材の育成・活用）

- 早い段階から畜産のプロを育てるため、教育機関等との連携による実践的な教育の実施が必要ではないか。
- 有能な人材を育成すること、後継者を作ることは経営者の役割であり、以下の取組が考えられる。
 - ①法人化による外部人材の受入れ、インターンシップの受入れ、②6次産業化、③酪農教育ファーム
- 各種の管理技術や情報を普及・定着させるため、行政等による情報発信及び農家自身による積極的な情報収集が重要。
- 畜産は、女性に大きな労働負担を要求する現場。一方、知的労働の増加や6次産業化など女性が活躍しやすい場面が増えていることから、能力を発揮しやすい環境を整備すべき。

2. 国産飼料の生産・利用の拡大について（1）～総論～

現状の認識

- 輸入飼料価格の高騰・高止まりを踏まえ、国産飼料の生産・利用を拡大する必要があるが、近年、飼料自給率、飼料作付面積ともに、横ばいで推移
- 国産飼料の生産・利用の拡大は、食料自給率の向上、食料安全保障の強化、資源循環型酪農の構築にも資する
- 我が国の畜産は、これまで輸入飼料（特に飼料穀物）に大きく依存してきたことから、飼料の保管・加工・流通のノウハウも輸入飼料を前提とした体系が確立

現状認識を踏まえた議論

（全般的な議論）

- 国産飼料については、保管・加工・流通等のノウハウがないことから、時間と費用をかけて腰を据えた施策により、国産飼料の生産・利用を拡大するための、新しい飼料生産・利用・流通体制の整備が必要ではないか。

（国産粗飼料の生産・利用）

- 国産粗飼料の生産・利用を拡大するため、草地改良、刈取時期やサイレージ等に関する技術向上による品質改善、圧縮梱包のような設備の整備による輸送コストの削減が必要ではないか。

（放牧の推進）

- 酪農における集約放牧、不作付地での繁殖雌牛の放牧の推進等が必要。
- 飼料用稲の立毛放牧は一見効率的だが、①周年で餌を提供できないこと、②耕種農家にとって飼料用米を作った方が有利なため、放牧農家に農地を貸してくれないことが課題。

（その他の飼料の生産・利用）

- イアコーン、SGS等の輸入飼料穀物を代替する濃厚飼料原料の生産・利用を推進する必要があるのではないか。
- エコフィードの生産・利用を推進すべきではないか。

2. 国産飼料の生産・利用の拡大について（2）～飼料用米・稲WCS等の課題～

現状の認識

- 飼料用米・稲WCSの生産・利用については、仕組みの整備は進んでいる
- 飼料用米生産の拡大の取組に地域間格差があり、また、畜産が盛んな地域と飼料用米を作る地域の分布が異なっている

現状認識を踏まえた議論

- 飼料用米の振興は、一つの光明で、良い施策。現在の施策を長期にわたって継続させ、飼料用米の定着を図るべき。
- 課題が明らかになってきたところであり、今後は地域への浸透が課題。生産、加工・流通、利用を通じた課題について、関係者の連携により、スピード感を持って着手するとともに、長期的な取組を継続。
- 量・品質の安定
多収性の専用品種の品種改良及び単収増、種子の供給体制の整備、品質の改善・安定が必要ではないか。
- 価格の削減、安定
・直播技術の普及など、現場の生産者の実態に即した生産コスト削減が必要ではないか。
・飼料用米利用のメリットとして、価格が国際市場に左右されない点であることを踏まえ、現在はトウモロコシ価格と連動して決定している価格について、変動を抑える仕組みが必要ではないか。
- 主食用品種との関係
現場では、主食用米への混入が問題であり、栽培の団地化の生産推進指導が必要ではないか。
- 運送・保管コストの削減
需給をマッチングするとともに、主食用の保管倉庫の空き部分等の既存施設を有効活用して、運送・保管システムを整備することが必要ではないか。

3. 加工・流通について（1）～酪農・乳業のサプライチェーン～

現状の認識

- 国内では、飲用需要が減少する一方、チーズ及び液状乳製品の需要が増加
- 飲用需要が減少しているにもかかわらず、生乳の供給減により需給は逼迫している状況
- 中小・農協系乳業で、ほとんど利益が出ない厳しい経営も見られる

現状認識を踏まえた議論

- 現在の最重要課題は生乳の増産であり、計画生産・需給調整に関し、生乳需給環境を踏まえた適切な配乳調整のあり方を検討することが必要ではないか。
- ブロック別の指定団体制度については、指定団体間の収入の差が大きいが、農家は地域から動くことができないことを踏まえ、数や地域別のまとめ方について、具体的に考えねばならない。
- 飲用乳需要が減少する中、飲用乳専門の多数の中小乳業工場が廉売競争しているが、飲用乳の工場の再編を行うなどにより乳業メーカーが製品価格に転嫁できる環境を作ることができれば、乳価を改善することができるのではないか。
- 中小乳業の再編が進んでいないが、強制的に進めることはできない。学乳を主体としている中小乳業のあり方、地域の特色を活かしてがんばっている小さな乳業への支援といった問題を踏まえて検討することが必要ではないか。
- 生産者・乳業が一体の諸外国の組合乳業を参考に、酪農・乳業が連携・協力して、資本力、技術力、営業力で世界に通用するサプライチェーン体系を作る必要があるのではないか。

3. 加工・流通について（2）～食肉のサプライチェーン～

現状の認識

- 輸入牛肉が部分肉で流通していることの影響や小売・量販店等の要請により、部分肉処理・加工の川上化が進展
- 集約・大規模化により、食肉処理施設の処理頭数は増加しているが、稼働率は横ばい

現状認識を踏まえた議論

- 食肉の流通は複雑で、流通合理化で経費削減で牛肉価格を下げられれば、消費拡大につながるのではないか。
- と畜場は、生産者と消費者をつなぐ必須の場である。と畜場においては、消費者の関心が高い生産関係情報を収集し、伝達する業務の充実が必要であり、牛トレーサビリティ制度のような確実に効率的な仕組みの開発・普及が重要。
- 牛肉の輸出促進が図られている状況に対応するためにも、と畜場へのHACCPシステムの導入など衛生品質管理の高度化が必要。

4. 需要に応じた生産と需要の拡大について（1）～消費者ニーズの理解と安全・安心～

現状の認識

- 少子高齢化等により、これまで、畜産物に対する国内の需要は、横ばい又は減少傾向
- これまで、生産者は農協の規格の範囲内による生産で、売れ残りリスクを認識せずに生産してきた
- 消費者は多様化・変化しており、生産者は、消費者に消費を強要できない

現状認識を踏まえた議論

（全般的な議論）

- 売れるものを売るのが基本。「付加価値を決めるのは消費者」との発想の転換が必要。
- 消費者は多様化しており、安全・安心の要求レベルも異なることから、それぞれの消費者に応じた対応が必要。
- ターゲット（消費者・市場）に応じ、政府、生産者、加工・流通関係者を通じたポジショニング（品質、多機能、安全性、イメージ等によるブランド化）、戦略・戦法の明確化が重要。

（安全・安心）

- 「後始末より未然防止」の考え方により、品質保証や科学的データ等の客観的な証拠に基づき安全を確保し、消費者と直接接するとともに普段から必要な情報を消費者が容易に見られる形で提供することにより、信頼を醸成することが必要。

（ブランド化）

- 地理的表示制度の活用を具体的に進めることが必要ではないか。

（食育）

- あらゆる機会を利用した食育を通じて、消費者が小さいときから栄養的な価値の重要性について理解してもらい、良好な食習慣に結び付けることが重要。

4. 需要に応じた生産と需要の拡大について（2）～牛乳・乳製品、牛肉～

現状の認識

- 国内では、飲用乳の需要が減る一方、チーズ及び液状乳製品の需要が増加
- 乳汁中の体細胞数基準は、乳房炎の早期発見等による乳質向上等を図るための指標として一定の効果
- 食肉消費の中心が外食・中食へシフトするなど、牛肉消費の構造は変化
- 牛肉の価格は、同じ格付けでも品種によって異なる

現状認識を踏まえた議論

（全般的な議論）

【牛乳乳製品】

- 付加価値の創造により、市場の拡大は可能。
- 海外乳製品との差別化による国内乳製品の需要拡大に取り組み、また、国内では、チーズ等について消費者の多様性に対応した多様な選択肢を用意することが必要。

（体細胞数基準）

- 乳牛の供用期間を延長できるのであれば、消費者の理解を得た上で海外並の基準とする検討をすればどうか。
- 品質で海外製品と差別化するために、安易に緩和するべきではないのではないか。

（全般的な議論）

【牛肉】

- 外食における和牛・国産牛肉の消費の広がりがポイント。
- 消費者の欲しいものが手頃な価格で提供されることが重要。一方で、高級品へのニーズ等への対応も必要。
- 牛肉の消費の拡大のため、食べ方の工夫や、どのようなシーンで提供するかというストーリー提案などが必要。

（格付）

- 生産者は、流通からの需要に応じて儲かる牛を生産しており、格付のよい牛を目標として生産する。
- 格付と、価格やおいしさとの関係がわかりにくい。
- 交雑種・乳用種は、加工向けとしては優れていることを踏まえ、交雑種・乳用種は、黒毛和種とは別の基準で評価してはどうか。

4. 需要に応じた生産と需要の拡大について（3）～6次産業化～

現状の認識

- 6次産業化により、畜産農家の中には、自主的取組で、生産者自身のブランド化に成功し、競争力の強化につなげている者がいる
- 一方で、6次産業化は負担も多く、営業状況の苦しい経営体もある

現状認識を踏まえた議論

（6次産業化のメリット）

- 加工・流通、市場や消費者の目線を学び、消費者等の評価を通じて競争力強化につなげることができる。
- 市場での畜産物価格の乱高下による売上変動リスクを減らし、自らの努力で、生産者自身の名前によるブランド化等により、生産者にとっての適正価格で畜産物を売ることができる。
- 女性が輝いて活躍できる場の拡大。

（畜産における6次産業化の課題等）

- 6次産業化に取り組む農家は、加工・流通を含め、消費者のシビアな要求に耐える品質を確保し、自ら販路を開拓し、農家が不慣れなクレーム処理に対応できなければ、産業として成立しない。
- 多額の初期投資、生産現場及び店舗の両立が必要であり、法人化を含め、規模に応じた体制が必要。人員や資金の余力がなく、一人の生産者が生産と販売の戦略に頭を使うぎりぎりの体制では、両方とも中途半端になり、経営が悪化する可能性。
- 品質管理の問題、販路の問題など、まだまだ課題は大きい。6次産業化は個々の経営の安定化には非常に有効。ただ、食料資源の安定的な確保や自給率などの解決にはならない。
- 1次産業があつての6次産業化。2次、3次の部門とのコラボによるバリューチェーン構築により、1次産業に利益をもたらすことが必要。
- 生産者と消費者の共感、生産者と加工・販売者の共働による需要の開発・創出が重要。
- 農家と地域等との連携、農商工連携、行政と生産者団体の連携により取り組むことが重要。

4. 需要に応じた生産と需要の拡大について(4)～輸出促進～

現状の認識

- 牛乳・乳製品については、東南アジアなどにおける人口の増加・中間層の成長・食の洋風化により、需要は拡大。海外での乳価上昇により、内外価格差は縮小
- 牛肉については、米国・EUを始め、各国・地域への輸出が解禁

現状認識を踏まえた議論

- 国別品目別輸出戦略に基づき、需要調査等により海外市場を把握し、商品・製品の 카테고리、ターゲット、ポジションを明確化し、流通網を整備することが必要。
- 競争は価格競争だけでなく、品質による競争が重要。日本の食の安全・安心を競争力として一番の売り言葉にして、輸出を前面に出すべき。
- 我が国の畜産物の品質の高さを国際的に認知させるために、農場HACCP認証を日本全体で継続的に取り組んでいくことが必要。
- ハラル認証、ハラル食材の普及が重要であり、農家への認知度向上のため、研修会等での周知が必要。